

ONE LOVE

通信

46号

2012年4月22日発行

ハッと気がついたら、日本に5カ月も滞在していた！本当はもう少し早くルワンダに戻るつもりだったのに…。そして季節が変わり、春になってしまっていた。う～ん、こんな調子で一年があっという間に過ぎてしまうのである。

今年はどんなふう過ぎていっていますか？ルワンダは雨期。今年もワンドラブランドに流れている川が氾濫した。水浸しになった義肢製作所の後始末に追われる私たち。いつまでたっても泥だらけ…。それもいいか。



【ルワンダに戻ってみると…】

知っている人も多いと思うが、ルワンダは94年の大虐殺後、目ざましい発展を遂げている。アフリカの優等生と言われるくらいだ。

この活動をスタートさせようと、初めてルワンダを訪れた時は、いろいろと不便が多かった。例えば電気。停電は当たり前。だから家庭内にも電化製品は少なかったように思う。わが家も冷蔵庫がなかった。肉などを買った時は、ビニール袋に肉を入れて、鍋にはった水の中で冷やしたものである。それでも朝晩涼しいルワンダでは、充分事足りていた。

それから水。最初住んだところは水道がなかったの、共同の水場で、ポリタンクに水を汲んで使っていた。そして雨が降ると、雨どいの下にタイヤを運び、せっせと雨水を溜め、洗濯や行水など全てのことに利用した。その後がんばって水道設備を整え、晴れて蛇口をひねると水が出るようになったが、断水は日常茶飯事であった。

そう言えば、あの頃はパソコンなんてのもなく、タイプライターやワープロを使っていた。だからもちろんインターネットもない。

携帯電話もないから、ひたすら固定電話である。しかしこれが曲者で、家に電話回線を引っぱってくるまで、毎日電話局に通い、手続きの願をしなくちゃいけないのである。結局1年近くかかったと思う。

そんなわけなので、日本との連絡は手紙。しかし出した手紙、受け取る手紙の何通かは、どこかで消息を絶ってしまうのだ。急いで連絡を取りたい時はファックス。電話局もしくは街角にあるキオスクでファックスを送ってもらう。国際電話の回線を利用するのであるからして、ファックス一枚送るのにかかる費用も決して安くはない。だから紙に無駄のないよう、びっちり伝達事項を書き込み、送るのである。

これは余談だが、ガテラと知り合って間もない頃、日本とルワンダ遠距離恋愛中の私たちの連絡手段は文通だった。外国の切手の貼られた手紙を受け取るのは、非常に心躍る。だからお互いせっせと手紙を出し合った。月日は流れ、手紙から電話に代わった。しかしルワンダのガテラ家には固定電話がなかったため、最寄りのキオスク（その頃はキオスクに公衆電話があった）のお兄ちゃんにあらかじめ電話をし、何月何日何時にガテラに電話をするから、呼び出し



ておいてくれと伝言するのである。そして当日、めでたくガテラと私はおしゃべりをするのであった。そんなふうに簡単に相手がつかまらないから、話ができた時の感激はひとしおである。

あの頃はあれで、いい時代だったなあと思うのだ。

そんな生活で、まず最初に悲鳴を上げたのは、冷たい水で行水を浴びなくてはならない私の体であった。いや、体というよりはむしろ心だったのかもしれない。ルワンダの朝晩は冷える。決死の覚悟をして、えいやっと冷たい水シャワーに飛び込むのである。しかしついに心が熱いシャワーを渴望してしまった。

みんなの寄付でがんばっているワンラブなのに、温水シャワーなどという贅沢をして良いのだろうか？冷たい水をも我慢しなくてはいけないのではないのか？そんな葛藤が続いた。人からすると大した葛藤ではないかもしれないが、当時私は毎日金物屋の前を通過しては、店先に置いてある温水器を横目で眺めていたのである。

…で結局欲望に負けて、温水器を買っちゃいました…。しかしルワンダで浴びる熱いお湯のシャワーは、体も心もとろけさせてくれました。そしてさらに欲望は募り、ついに冷蔵庫も買ってしまおうのである。

そんなふうに月日は過ぎ、2012年。人々はいつの間にかパソコンを駆使し、インターネットを操り、携帯電話を持ち歩くようになったのである。その発展のスピードは、日本から来た私も驚くばかりである。多分若い世代のルワンダ人は、私よりもよっぽど上手にそれらの機械を操り、生活を便利にしているはずである。

もともと私は日本でも機械を操るのが得意でない。だから電気を使う製品は、いつも人より遅れて利用し始めている。日本でも浦島太郎。ルワンダでも浦島太郎。どっちの国にいても、ついていけなくなってきた。

5カ月ぶりに戻ったルワンダは、案の定またきれいになっていた。ひときわ目立つキガリタワー、町の中心にある高層ビル。きれいに緑が手入れされているロータリー。要所所には信号機が当たり前のよう設置されている。信号機に慣れていなかった私は、時々車を運転していて、それを見落としてしまう。



手入れされたロータリーでは、こんなふうに結婚式の記念写真を撮る人たちにぎわっている。おしあわせに〜。

人々の服装もあの頃とは違う。清潔な服装になったということはもちろんだが、それよりも気になるのは、ルワンダっぽい服装をしている人が減ったということだ。いかにもアフリカという大胆な柄の布で作られたアンサンブルは大好きだった。でも最近はその格好をしている女性の姿が少なくなった。若い娘はほぼ西洋の服装を身につけている。これは何だか残念だが、日本人が着物を着なくなったのと

同じことなのだろう。

そのせいか、以前反物を売っていたお店は、いつしか携帯電話屋になり下がってしまった。きっとこっちの方が儲かるに違いない。

街角で日用品を売っていたキオスクも、今は姿を消し、きちんとした店となっている。キオスクのおじさんやおばさんたちと気安く交わっていた会話が減ってしまった。日本のようにスーパーで買い物し、レジで会計というつまらないスタイルである。

確かにルワンダは豊かで便利になってきた。お店に並ぶ品数も、いろいろな輸入品が増え、色とりどりになっている。車の数も増え、軽い渋滞を起こす時さえある。

しかしなんとなく寂しい気がするの、私のわがままだろうか？

日本が戦後経済成長し、人々の暮らしが豊かになった。それと同じ道をルワンダは歩んでいる。でも何だかちょっと寂しいのである。日本が経済成長と共に失くしてしまったものを、ルワンダも失くしてしまうような気がして…。

ルワンダでの人と人とのつながりは、少なくとも今の時点では日本より強いような気がする。でもそれもいつか希薄になり、親は自分の子供たちが何をしているのかわからないような状態になってしまうのだろうか？それは見たくない光景である。いつまでも濃い血の流れているルワンダ人でいてほしいなあ。

日本からルワンダに戻ってくると、入れ替わり立ち替わり変化する街並みに躊躇しつつも、この発展を一番望んでいるのはルワンダ人なのだから、私ごときが口を出してはいけないと思う日々なのであります。

これはじじいばばの嘆きなのであろう…か？

【山と山は出会わないけれど…】

アピリンピック韓国決戦に参加して、その足で日本に戻り、ガテラは2カ月遅れで到着。今回の滞在も、日本のあちこちで活動報告をさせていただきました。

ガテラは一昨年日本に来たものの、ブルンジから呼び出しがかかり、何もできないまま戻る羽目に。だから今回の滞在は結構楽しみだったようである。しかしまた寒い季節か〜。また「寒い寒い」を連発するんだろうなあ、ヒートテックのシャツや、もこもこの靴下、そして手袋などを買いそろえて到着を待った。

成田空港で出迎えたガテラは、ちょっと疲れているようだった。私が日本にいる間、ルワンダとブルンジを行き来して、更に材料の買い出しや、家族を見舞うためケニアに行ったりと、落ち着く暇がなかったようである。まず少しゆっくりしてもらおう。

…と思いきや、普段慌ただしくしているせいか、のんびりすることに慣れていない。家にも突然腕立て伏せを始めたり、持ってきた書類に目を通したり…。そばにいるとこっちが落ち着かないのである。

今回は学校・教会・その他いろいろなところを回りました。初めて訪れるところもいくつかありました。

ガテラがまだ日本に来てないうちに、私も一人であちこち回った。移動の新幹線の楽しみは、何と云ってもお弁当。駅のキオスクでお弁当を選ぶのはわくわくする。その土地の美味しいものを食べようと思いつつ、肉食の私はどうしてもとんかつ弁当とか、そんなつまらないものを選んでしまい後悔するのだ。そして東海道新幹線の中で食べるアイスクリーム。このアイスは世界一おいしい。嘘だと思ったら、食べてみてください。

活動の話をガテラ抜きで、一人でするのはいつも物足りない。ワンラブの酸いも甘いも全て知っているのに、何だか話残したことがあるような気になってしまう。どんなにルワンダに長く住んでいようと、私はルワンダ人ではない。彼らの気持ちを理解しようと思うけれど、決して同じになることはない。だから私が話していることは事実であるが、やはり外国人が見たルワンダであるということとは否めない。

だからガテラがルワンダ人としてルワンダのこと、ワンラブのことを話した方が、より説得力があるのではないかと常に思ってしまうのだ。そんなわけで、話し終わった時は、いつも「これで良かったのか？」と悩むのである。ガテラだったら、こう説明したんじゃないか？もっと適切な表現があったのではないかと。

そんなふうに自分が人の前で話すようになってから、学校の先生はつくづく大変な仕事だと思うようになった。毎日、毎時間、生徒たちがより良く理解できるように授業をするのである。しかも10分の休み時間は、子供たちにまわりつかれ、トイレに行く暇もないんじゃないかと思うくらいである。もっと大変なのは、自分が話したことによって、生徒の人生を変えるかもしれないということである。先生の言った一言で、生徒は大きくなるし、傷つきもする。事実、私も幼い頃言われた先生の一言を、未だに根に

持って、それがコンプレックスとなっている。

だから先生って本当に大変だなあと思う。責任重大だし、それ故とても魅力的な職業でもある。



この学校でも髪の毛を引っ張りまくられるガテラ。しかしまんざらでもない様子。

この活動を始めてから、いろいろな学校で、先生や生徒たちに出会い、たくさんのことを教えてもらった。

生徒たちもおもしろい。小学校の低学年は「質問ありますか？」と聞くと、うるさいくらいに手をあげる。「ガテラさんはラーメンが好きですか？」とか「アフリカでライオンに会って、怖い思いをしたことはありますか？」とか。そんな質問に答えるのはとても楽しい。

しかし残念なことに、高学年になるにつれ、段々質問が減って来る。みんな、周りを意識して、恥ずかしがって手をあげないのだ。そして一番無反応なのが大学生でもある。人生の中で、一番物事を貪欲に知りたくなる年齢であるにもかかわらず「質問ありますか？」と聞くと、みんな示し合わせたように下を向くのだ。これはいかんよ。

だからガテラも「怖がらないで、何でも質問してくれ」と言うのだが、それでも反応がない。気まずい沈黙…。そんなに話が面白くなかったかなあと不安になる私。

で、チャイムが鳴る。そうすると、一人二人と近寄ってきて、質問をしてくるのだ。これもいかんよ。人の前では質問するのが怖くて、一人なら出来るってのは問題だなあ。



ルワンダ事務所代表ガテラより

【男の美学】

ただ、生きながらえるか。それとも何かのために戦い、力尽きるか？

これはランボーの映画の中に出てくるセリフの一つであり、私の好きなセリフである。

のほほんと生きていくのも人生。ダメかもしれないとわかっているけど、戦いを挑むのも人生。

どうせだったら後者を選びたい。

もう一つ私の好きな映画にロッキーがある。そう、あのボクシングの映画である。辛くてめげそうになる時、真美と一緒にロッキーを見る。そうすると、俄然力が湧いてくるのだ。負けるかもしれない相手に立ち向かっていくロッキーの姿は、男としての血を奮い立たせる。う～ん、素晴らしい。

最近自分も年をとったせいか、つい「最近の若い者は…」というセリフを言ってしまう。特に男性に対してだ。

全くもって根性がなさすぎる。

物事を簡単にあきらめすぎるのだ。そして泣き言を言う。

男たるもの、簡単に泣いてはいけぬのである。大体人前で泣くなんて、かっこ悪いではないか。

人生がしんどいのは当たり前。楽しいことの方が少ないのだ。

そんな若者たちも、一人一人と話をしてみると、結構いい奴だったりするのだが、打たれることに慣れていない。仕事を与えても、最初の給料をもらおうと飲んだくれてしまったり、遅刻を平気でするようになる。そのくせ要求は果てしない。

仕事に就く前は「仕事をくれ」と泣きそうになりながら訴えているくせに。

いかん、いかん。こんなことではいかん！

男は常に戦っていかなくてはならないのである！それが負け戦であろうとも、自分の中にある魂を守るため、戦わなくてはならないのである。

…とそんなことをロッキーを見ながらつぶやいていると、横で真美がじーっと見ている。果たしてこの気持ちが女にわかるであろうか。わからなくてもそれでいいのだ。男には男の美学がある。ふんっ。

もちろん私も初めて人前で話す時は、ものすごく怖かった。心臓が口から飛び出すんじゃないかと思うくらい、どくどく鳴った。でもえいやっと飛び込む度胸をつける。そうすると、だんだんその度胸が快感にも変わって来る。で、思ったのは、緊張する時間があるってのは幸せだなあってこと。

相変わらず初めての場所、初めての人と話す時は、かなり緊張する。相手がどんなふうに受け止めてくれるかとても気になるのだ。これは初めての場所でなくても、人前で話す時は一緒である。だから私が報告会が始まる前に非常に無愛想なのはお許しください。単純に緊張しているだけなのです。

その点堂々としているのはガテラだ。彼は動じるということがあるのか？と思うくらい、いつもどっしりと構えている。誰を相手に話しても、ビビるということがほまほまない。そして来る人を拒まない。まずは誰でも受け入れる。常に警戒心を抱いてしまっている私とは正反対だ。



この日の報告会には、研修員アシエールも参加しました。みんな来てくれてありがとう。

でもガテラが一番心を開いている相手は子供たちなのかもなあ。純粋に自分に近づいてきてくれる子供たちは、ガテラの心の休み処となっているみたいだ。

そんなふうに、今回の滞在中もたくさんの人と出会いました。昔から知っている人、初めて会う人、本当に良い時間を過ごすことができました。ありがとうございました。古くからの友人が、元気な顔を再び見せてくれる。これほどありがたいことがあるだろうか。

ルワンダでは、簡単なことで人が死んでしまう。昨日まで元気だった人が、ちょっとした病気で、そして全くつまらない事故で死んでしまう。私たちもこの活動を始めてから、たくさんの友人・知り合いを失った。そしてルワンダ人は、大虐殺と言う悲しい過去のため、愛しい人たちをあっという間に失ってきた。

だから再び出会えるということ、非常に大切にしている。旧友に会った時の挨拶はエンドレス。

アフリカのことわざに「山と山は出会わないけれど、人と人は出会う」と言うのがある。山はその場所に留まっているので、山同士が出会うことはない。でも人は動き回ることによって、出会いが発生する。これは私が一番好きなことわざだ。

ワンラブを始めて、数えきれない人と出会った。そしてこれからも新しい出会いが待っている。

必要なのは前に一歩踏み出して、その人に話しかける勇氣。だから大学生の皆さま、ぜひ物怖じしないでその一歩を踏み出しましょう。ガテラも私も取って食わないからさ。

【さぼるのはやめなさい！】

ガテラと私、二人不在のルワンダ。その間スタッフたちはきちんと働いていたのだろうか？と思いながら、義肢製作所に足を運ぶ。このタイミングで私がルワンダに戻ってくるというのは、部屋のお掃除をしてくれるおばちゃん、ママジャンティを除いて誰も知らない。つまり抜き打ちで帰ってくるのである。突然帰ってきて、誰が真面目に出勤しているか、誰がさぼっているかを調査しようというものだ。

ああ、こっそり義肢製作所をのぞくと、まだ来てない奴、勝手に休んでいる奴…。ぐったり肩の力が落ちた。

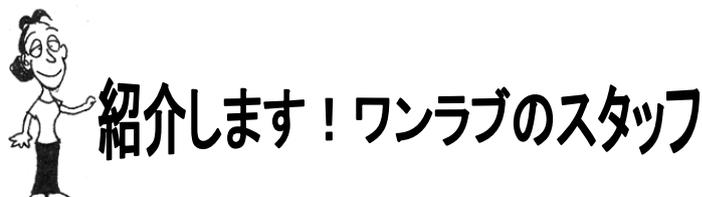
わかりますよ。鬼の居ぬ間に洗濯。私もさぼった経験がないわけではない。しかしこの数はあまりにもひどいのではないの！しかも悪いことには、先頭に立ってみんなを引っ張っていかなくてはならない立場の奴らが、率先して自由気ままにふるまっている。

どっか〜ん！

早速怒りが爆発してしまった…。みんなを呼び出して、こんこんと説教をする私。私だってしょっぱなから説教などしたくない。しかしここで黙ってしまうとなめられる。つくづく思う。嫌な立場だなあ…と。最近では私の姿を見ると、蜘蛛の子を散らしたようにみんながそそくさと立ち去るのである。悲しいよう。

ワンラブをスタートしてからもう16年になるのに、まだこんなことを言い続けなくてはいけないのか…。これはルワンダ人と日本人の違いなのだろうか？私がうるさ過ぎるのだろうか？

そんなことをウジウジ、ウジウジ考えながら今夜も更けていくのである。



3月、6人目の研修員アシエールの義肢製作研修が終わりました。出発早々乗るべき飛行機に乗れなかったというアクシデントに見舞われましたが、何とか7か月の研修期間を終えることができました。

とにかくその長身ゆえ、どこで待ち合わせしても非常に目立つアシエール。そして大きい体のくせに、なんとなく母性本能をくすぐる愛らしい性格。

研修先の義肢製作所を訪れると、寒くて親方からもらったという上着を着て作業中。しかしその上着は、アシエールが長身のため全く丈が短く、胸の下までしかない。つまりおっぱいのあたりまでしか隠れていないのですね。

今回はガテラの装具が日本滞在中に壊れてしまったので修理をしてもらうことに。くると石膏の包帯で、ガテラの足を採寸する。そしてメジャーを使って寸法を測る。やはり親方の手つきはカッコいい。アシエールはそれを一生懸命見ている。



今号の患者さん

驚いたのは意外とアシエールの気がきくということだ。親方の先回りして、必要な道具をそろえようとする。そんな姿はルワンダでは見ることができなかったのに。

そしてもう一つ。親方が患者さんの寸法を測っている時に、アシエールはその数字をカルテに書きこむ。自分の知らない言語で数字を聞き取るというのは、結構大変である。一回反芻しないと、その数字が思い浮かばないものであるが、意外や意外。アシエールはスムーズに、聞き取った数字を書き込んでいる。私など、今でもルワンダ語で数字を言われると3秒くらい考えてしまうというのに。

親方はどちらかと言うと小柄である。アシエールと一緒に作業していると、どうしてもその背の違いが気になってしまう。腰をかかめない限り、親方の目線に合わせられないのです。作業台の高さも、ルワンダで使っているのよりも低いため、ちょっと使いにくそう。



ガテラの装具、修理中。短い上着を着て、親方の手元をのぞきこむアシエール。

親方の評価が気になるところだが、どうやらセザールに欠いて、飲みこみは早いとのこと。それならば結構期待できるかな？

研修中、寮で行われたイベントを見に行っただが、リズム感は今一つのような様子である。報告会にも足を運んでもらった。日本ではこんなふうにして動き回っているということを見せたかったのだ。自分たちの給料がどんなふうに分けられているか、それを知るのも大切なこと。毎月の給料が当たり前のようにもらえて思っているわけではないのであるぞ。在日ルワンダ大使にも表敬訪問に行った。彼も大使と言う肩書きのある人間を前にしても動じない。ルワンダ人って何故あんなに堂々としているのであろうか？ああ、それから横浜で行われたアフリカン・フェスタでは、ルワンダの衣装を着て、客引きをもらった。ここでも長身の彼は重宝したのである。

でもやっぱりルワンダ語を話すことに馴れていたのかな？ガテラと会うと、延々としゃべりまくって、思わず終電を逃してしまいそうになった。

アシエールも温泉に行ったそうである。大変気に入った様子で、これまた湯あたりしそうなくらい温泉につかっていたとか。あの気持ちよさは、世界中のルワンダ人（変な表現だが）を虜にしてしまうらしい。ルワンダにも温泉が湧いているらしいが、その有効活用を切に望む。

さて、アシエール君。ルワンダに戻ってどんな義肢装具士に育つやら。どうも最近、今まで研修を受けた先輩たちが、日本で身につけたはずの仕事に対する姿勢を忘れかけてきているようなので、技術うんぬんと言うよりは、仕事の態度に喝を入れてもらいたいものである。

ある日生後6か月の赤ちゃんが、お母さんに連れられてやってきた。

ぷくぷくと太った、とても元気そうな赤ちゃんだ。でも右足のひざから下がらない。生後4か月の時に壊疽にかかり、切断を余儀なくされたそう。

病院の先生からお母さんは言われたらしい。「今のうちから義足に慣らしておいた方が良いでしょう」と。わらをもつかむ思いでやってきたのかもしれない。

早速ワンラブ全ての義肢装具士を動員して相談をする。何しろこんな小さい赤ちゃんの義足など、作ったことがない。私自身も日本で赤ちゃんの義足は作ったことがない。

あまりたくさんの人に囲まれ、足をつままれ、大声で話し合っているものだから、赤ちゃんはビックリして大泣き。

切断した傷の部分はきれいに治っている。でも足がまるまる肥って、この足で義足を履くことができるのかわからない。みんなでけんけんがくがくやるものの、結局作った経験がないことから結論が出せない。

そこで日本にいる義肢装具士S氏に相談をした。義足をつけ始める時期は物心がついていない頃、つまり今のうちにつけ始めた方が良いでしょう。でも赤ちゃんは最初のうちは怖がって大泣きするとか。それは怖いから泣くのと同時に、もしかしたら義足が合っていないから、痛くて泣くということも考えられるらしい。だから常に切断部に傷を作っていないか注意しながら、義足を履かせなくてははいけないそう。

でも一番の問題は、赤ちゃんなんて、どんどん大きくなっていくものである。だからその都度作り直さなくてははいけなくなる。と言うことはつまりお金の問題が発生してくるということだ。それだけの予算を家族が負担するとなると非常に大変である。そしてまた、私たちもその赤ちゃんのために、それだけ頻りに義足を作ることは不可能である。



泣き疲れて眠ってしまった赤ちゃん。義足を作ることができなくて、ごめんなさい。

ああ、またここで作ることができない義足にぶち当たった。

赤ちゃんは泣き疲れたのか、お母さんの胸の中ですやすやす眠っている。結論を出せないまま、お母さんは帰って行った。

残った私たちは、何とも言えないやるせなさに、みんなむっつり黙りこんで、午後の仕事を再開したのである。

【ひとりごと】

日本滞在中にテレビを見た。それは南の、いわゆる文明の届いていない島国に住んでいる家族が、日本にやってきて、その文化や発展に驚き、戸惑う様子を紹介したものだ。

例えば早いスピードで走っている電車の勢いに酔ってしまったり、見たこともない雪と戯れたりなど。

以前の私であれば、その類の番組を毛嫌いし、決して見たいと思わなかった。なぜならば、未開の土地から出てきた人間が、文明に触れ、驚き戸惑う様子を、どこか馬鹿にし、そうすることによって自分たちの優越感を味わっているような気がしたからだ。

しかし彼らが雪と戯れている姿や、日本の食べ物や純粋に試して食べている姿を見て、新しい物事に対し、素直に驚くということを忘れてしまった自分に気がついた。それほど彼らの振る舞いは素直で新鮮だった。

この手の番組は、多分賛否両論あるだろう。でもそれは受ける側によって、180度見方が変わってしまうということもわかった。

そしてどうせなら、テレビの中の彼らが、純粋に驚いたり、喜んだりしたように、私自身も新しいことを素直に感じることができるような状態でいたいと思った。たまにはテレビを見るのも悪くない。

【ホームページが新しくなったよ！】

長いこと更新もせずそのままにしてしまったホームページ。早く新しい情報に入れ替えたいと思っていたものの、なかなか実行できず。しかし！やっとリニューアル！3月からもっともっと見やすく、わかりやすくなりました！

ワンラブの情報だけでなく、ルワンダの情報も、これを見ればばっちり！写真も新しくなったし、このワンラブ通信もHPから読むことができます。

さらっと読んでも、じっくり読んでも、とにかくためになるこのHP。一度見てくださいな。

<http://www.onelove-project.info/>

ブログも見てね。

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆様のご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【ご寄付ありがとうございました】

今回は日本に滞在していたということもあり、報告会を開いたり、皆さんとお話をしたりしたため、いつもよりもたくさん寄付が集まりました。本当にありがとうございました。

ワンラブ通信45号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした。

12月 1, 319, 508円

1月 1, 138, 939円

2月 2, 584, 000円

(但し2月は助成金を含みます)

このおかげで、ルワンダとブルンジ合わせて、次の製品を配布することができました。

義足 14本

装具 12本

杖 45人

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【年季入り支援団体のご紹介】

京都には「ワンラブ関西」という力強い味方がある。ワンラブの活動がスタートした当時から、関西方面で報告会を開くお手伝いをして下さる集まりだ。

中心になっているのは山本保弘氏とその奥さま。ガテラと真美は シスター中村のお陰でひょんなことからこの2人と出会い、そのつながりは今でも続いている。

そんな山本氏は、真美の表現によると「ガテラに惚れた」。ガテラは山本氏の表現によると「サムライのようだ」。たしかに二人は男っぽいところが似ている。

山本氏は常に志を持って動き回っている中年男性だ。最近京都の街をきれいにしようと、毎週土曜日早朝から、若者を引き連れて掃除をしている。

そんな山本氏だから、報告会を開きたいと一言お願いすると即座に動いてくれる。その周りに集まるワンラブ関西の仲間たちも、気持ちのいい人たちがばかりだ。押しつけがましくなく、さらりとおにぎりを作ってくれたり、机をせせと並べてくれたり。そんなやり方が、どんなに私たちを支えてくれているか。まさに痺いところに手が届いているのだ。

縁の下の力持ち、と言っては失礼なほど、存在感は大きい。ありがとう、ワンラブ関西！

【おことわり】

- * 発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。
- * 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはありません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。

ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 TEL: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info (日本事務所) onelove@rwanda1.com (ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信46号 2012年4月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

